更生刻々

第９号
令和３年１２月９日発行

東京矯正管区
Tokyo Regional Correction Headquarters
法務省東京矯正管区更生支援企画課
☎048-600-1560（直通）
✉ 1.toukyoukyousei.j7u@i.moj.go.jp
ホームページ
http://www.moj.go.jp/kyousei1/kyousei08_00101.html

再犯防止　政府目標達成！

2019年出所者　2年以内再入率　15．7%まで低下

２０１２年７月、内閣総理大臣が主宰する「犯罪対策閣僚会議」は、再犯防止施策を政府全体で推進していくため、「再犯防止に向けた総合対策」を決定しました。「再犯防止」を前面に押し出したこの総合対策においては、ある数値目標が掲げられることになります。

それが、「出所後２年以内に再び刑務所等に入所する者等の割合（２年以内再入率）を今後１０年間で２０％以上減少させる」という目標です。

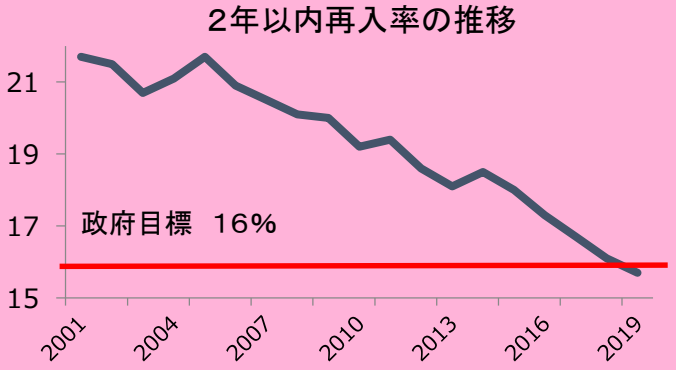
具体的には、総合対策策定前５年間の２年以内再入率の平均値である２０％を基準値とし、そこから２０％減らす、つまり１６％以下にすることを目指すことになりました。

その後、２０１６年の再犯防止推進法施行などにより、再犯防止施策の実施主体は、国から地方公共団体の皆様へと波及し、２０１８年からは、多くの地方公共団体において「地域再犯防止推進モデル事業」が実施されるなど、着実に再犯防止施策は広がっていきました。

その結果として、２０１９年に刑務所を出所した人の２年以内再入率は１５．７％となり、初めて政府目標たる１６％を下回ることができました。

これは、再犯防止・更生支援に携わっていただいた皆様のご尽力の成果と考えております。

今後とも、再犯防止・更生支援にご協力のほど、よろしくお願いいたします。



地方公共団体による事業　ご紹介コーナー

東京都・（公財）東京しごと財団主催　ソーシャルファームマッチング会に参加しました！

東京都は、「ソーシャル・インクルージョン」の考え方に立ち、就労に困難を抱える方を多く受け入れる社会的企業「ソーシャルファーム」の創設を促進し、就労を希望する全ての都民がその個性と能力に応じて働くことができるよう応援するための条例を制定しました（令和元年１２月施行）。

この条例に基づき、東京都は独自にソーシャルファームを認証しており、その創設と経営を様々にサポートされているところ、本年１１月８日、認証ソーシャルファームと、就労に困難を抱える方を支援する機関とのマッチング会が実施され、東京矯正管区も参加してきました！

東京矯正管区には、「コレワーク関東」という、刑務所や少年院に入っている人たちの情報を集約・管理し、彼らの採用を希望する事業主の方に情報を提供する機関があります。

マッチング会では、コレワーク関東室長が、認証ソーシャルファームの皆様に、コレワークの利用方法をご案内し、その後ブースにて個別の相談にも応じさせていただきましたが、時間いっぱいまで、多くの事業者様にブースに来訪いただき、出所者雇用の関心の高さを感じました！

更生刻々

協力雇用主　白石工業相談役　白石　宏行　さん

「採用して、苦労して、育てていく」

更生支援を語る

平成17年から協力雇用主として登録し、罪を犯した人たちを150人以上雇用してきた。
現在も社員のうち30人以上がかつて罪を犯した人たちであり、15年以上働いている人もいる。

協力雇用主になったきっかけは何ですか？

私が先代の父のもとで、白石工業に入社したのは、もう41年前になります。

当時、仲良くしていた同僚が、実は殺人を犯して刑務所に入っていたということを知ったんです。仕事はまじめにこなしていて、とてもそんな風には見えなかったんですが。

当時から、父は、警察などからの依頼に応じて、罪を犯した人を雇っていたようです。

なので、協力雇用主という制度ができる前から、罪を犯した人と一緒に働くということは、私にとっては「自然なこと」でした。

協力雇用主としてのやりがいとは？

私は、保護観察所やコレワークからの依頼に応じて、これから協力雇用主になろうとする方の相談に乗ることもあるのですが、その方たちにいつも言うのは、単に労働力が欲しいから、という理由で雇っても、彼らはすぐに辞めてしまう、ということです。

そして、会社の代表として、彼らとどのように接するのか、彼らが罪を犯したという事実を社内でどのように扱うのかなどをきちんと考えた上で雇ってほしい、とお願いしています。

罪を犯した人を雇うというのは、結構大変です。再び罪を犯してしまう人もいて、警察から呼び出されて迎えに行くことや、ケガをさせた被害者の方への弁償を会社で立て替えたこともあります。

それでも、採用して、苦労して、育てていくと、うちに居場所を見つけてくれる人も出てきます。

どこにも居場所がなかった人が、うちで居場所を見つけ、家庭を持って、独り立ちしていく。その場に立ち会えるのは、何よりの楽しみです。

41年にわたる活動を、湧き出るように語る白石宏行さん

更生小考　子ども食堂

パラリンピック期間中のこと。あるツイッター投稿が話題になった。選手村の横断歩道を、義足や車いすの選手たち７人が一列になって渡る写真。ビートルズのアルバム「アビイ・ロード」のジャケット気分で撮った。ＩＯＣ総会の大会招致でスピーチした谷真海さんが、「みんなちがって、みんないい」との言葉を添えて投稿した。童謡詩人金子みすゞの「私と小鳥と鈴と」の中の一節だ。

福祉的な活動というと、ある枠組み内でのものとのイメージが強い。ところが、多様性をもって根付いた活動がある。民間生まれの子ども食堂だ。運営するのは、個人、ＮＰＯ、生協、社協、寺や檀家、飲食店など様々だ。大手コンビニも乗り出したし、秋田ではプロバスケットチームが運営者になっている。

「子ども食堂」は、東京都大田区の「気まぐれ八百屋だんだん」が発祥とされる。「だんだん」は店主の出身地、出雲地方の方言で「ありがとう」。「見えない貧困」に気づいた店主が、「人と人のつながりが出来ていけば」と始めた。

「ごはんが足りていない子どもは、ほかのことも足りていない」と関係者はみている。子どもの貧困が問題なのは、社会的孤立や格差拡大、虐待、非行と結びつきやすいから。よく考えると、子ども食堂の役割の多くは、家庭や学校に求められてきたものと重なることに気づく。子どもたちのセーフティネットといえる。家庭の外に家庭を緩やかにつくり、乾いた地域の中にコミュニティをつくる。

子ども食堂の間口は広い。食材の調理、後片付けなどで、学生から高齢者まであらゆる年代が運営に関わることができる。スタッフを務める女子学生が、あるテレビの番組でこう話していた。「コロナ禍で大学のキャンパスにも行けなくて、子ども食堂が私の『こころの居場所』になっています」。

「私と小鳥と鈴と」は題名とは違い、詩の後段では「鈴と、小鳥と、それから私」となっている。「私」の位置が動いているのだ。その後に「みんなちがって、みんないい。」。すべてを包み込むまなざしで詩がくくられる。それぞれの存在に気づいたのは「私」。それに気づかせてくれたのは「あなた」。みすゞの詩は見えないものに気づかせてくれる。そこにあるのは、禅でいう隻手の音だろうか。

関東更生支援ネットワーク会員100名突破しました！

「１年生になったら、友達１００人できるかな♪」というこどもの歌ではないですが、本年６月に立ち上げた「関東更生支援ネットワーク（更生刻々第７号参照）」、この度、会員数が１００名を超えることができました。

矯正・保護の関係者のほか、地方公共団体の皆様、福祉、教育、医療関係者、民間のNPO団体、学生などなど、再犯防止・更生支援に興味・関心がある方を中心にご加入いただいています。

活動内容はメルマガ配信が中心ですが、コロナも落ち着いてきましたので、更生支援を会員の皆様と一緒に考えるセミナーなども開催していきたいと思っています！

どなたでも無料でご参加いただけますので、加入を希望される方は、「ご所属、お名前、メールアドレス」を明記の上、当課宛てメールにてご連絡ください。

右のQRコードからもお申込みいただけます。⇒
（読み込むとメールが立ち上がります）